【取り組みやすい支援】

- 記録の活用：体調管理、服薬管理、日々の振り返り、食事内容、睡眠等についての記録表を提示すると、きちんと書いてくれることが多い。可視化することで日々の生活を支援者が知ることができ、ニーズ把握がしやすくなる。
- スキル提供：経験がないためにできなかったこと（家事や買い物等）に関しては、一緒に行ったり、具体的なアドバイスをしたりすることで、スキルが獲得されやすい。
- スケジュールの提示：選択・掃除等のスケジュールの提案は、相談しながら一緒にスケジュールを組み立てていくことで、入居者も納得しながら受け入れることができる。
- 本人に困り感のあるものの支援：洗濯しなければ着る服がなくなってしまうなど、やらなければ本人が困ってしまうものに対しての支援は、入りやすい。

【取り組みが定着しにくい支援】

- 本人の意向が強いものの支援：野菜をとらない、医者にはかからない等の決め事のある入居者に対しては、それに対する提案が入りにくい。家事の手の抜き方等も、本人の意思が強いと受け入れられず、結果無理をして体調をくずしてしまうこともある。
- マニュアル化しにくいものの支援：洋服にゴミがついている等、細かいものについては支援に限界が出てくる。
- 支援者が確認できにくいもの支援：入浴でどこまで洗えているかなど、確認しにくいものの介入は難しい。
- 本人に困り感のあまりないものの支援：たとえば節約意識は、仕送りをふんだんにもらっていると意識がいきにくいため、必要性を伝

えることが難しい。部屋がちらかっている、入居者が入浴の必要性を感じていない等も、介入の難しいケースである。

- 言動の振り返りの支援：不適切な言動があった場合は、その都度振り返る事後的な対応になってしまうため、定着化が難しい。
- ニーズを発信するための支援：本人の潜在的なスキルにもよるが、困ったことを自発的に伝えるための支援は難しい。困り感を持ちにくく、ニーズとして本人がとらえきれないことも影響する。

【時間を要する支援】

- 生活を豊かにする支援：食事のメニューを広げたり、余暇の幅を広げたりする支援は、入居者の納得や経験を一つずつ積み上げていく必要があるため、時間がかかる。
- 長期的に見ていく必要のある支援：たとえば身だしなみで季節に合ったものを選ぶのは、１シーズンできても、次のシーズンもできるか、次の年もできるか、長期的に見ていく必要がある。
- 金銭感覚：経験の乏しい人だと、一つずつの経験の積み重ねで金銭感覚が身についていくため、支援には時間がかかる。
- 自分の得意な点や苦手な点を知るための支援：長期的な生活の中で、支援者との関係を築きながら、相談等を通して自分を知っていく必要がある。

D．考察および結論

【発達障害者の地域生活支援について：平成 24 年度の取り組みから見えてきたこと】

滋賀県と横浜市の発達障害者に対する地域生活支援の取り組みにおいて共通認識できたことは、記録用紙を活用し、可視化することで入居者の生活を把握することや、スケジュールやスキ

ル獲得のための方法提示など、構造化のテクニックを駆使した支援は、入居者の地域生活支援について有効であったということである。その一方で、日々の細々とした生活のニーズや、マニュアル化しづらい部分に関しての支援は、なかなか支援が定着できない部分があった。支援が定着しにくい部分に関しては、いかに構造化の視点を持った支援を組み込めるかによって、支援の取り組みやすさも変わってくる可能性が垣間見える。

また、入居者本人が困り感を持っていない、またはニーズとして発信できない部分に対しての支援にも課題が残った。生活スキルがもともと高かったり、支援者が介入すればすぐにスキルを獲得できたりするケースは多いが、本人が必要性を感じていないと、そのスキルを継続的に使用していくことは難しい。滋賀県も横浜市も、取り組み期間は概ね 2 年となっているが、その間に入居者たちが自主的にスキルを継続して使用し続けられるかは、注意深く見ていく必要があり、そのためのアプローチも検討していかなければならないと思われる。特に「これが正解」というものがない生活の部分の支援については、パターナリズムに陥らないためにも、支援者同士の価値観のすり合わせや話し合いも不可欠になってくる。

「人とのかかわり」の支援は、特に支援の難しさが際立っており、発達障害者のコミュニケーション部分の難しさがあらわれている。いかに支援者が困ったときに頼りになる存在になれるかによって、入居者のニーズの発信の度合いも変わってくるし、支援者のニーズを受け止められる幅も変わってくる。支援者に求められるものをまとめていく作業も、今後の課題として残っている。

【今後の課題】

横浜市は今回の事業としての取り組

みが始まって間もなく、まだ地域移行がなされたケースはないため、共同研究としての発達障害者の地域移行支援の効果や課題は、現在まとめられる状況にない。しかし今後、地域移行が実現するケースが増えていくにあたって、発達障害者の地域移行に有効な支援方法や仕組みを提唱することができると考えられる。今後も日々の実践を通して、発達障害者の地域移行の取り組みを検討していきたい。

E. 引用文献

該当なし

F. 研究発表

1. 論文発表

肥後祥治 (2012). 自閉症児（者）のより良い自己決定，自己選択のために. 特別支援教育研究, 6, 13-15.

肥後祥治・熊川理沙 (2013). 特別支援教育導入期の高等学校における特別支援教育の進展に関する研究: P県における追跡調査より. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会学編, 64, 95-106.

肥後祥治・福田沙耶花 (2013). 自閉症幼児のコミュニケーション指導における情報伝達行動の形成の試み: 報告言語行動・「なぞなぞ遊ぶ」をとおして. 自閉症スペクトラム研究実践報告集, 10, 35-46.

岸川朋子 (2012). 発達障害の人たちのひとり暮らしを地域で支援するために: 横浜市のサポートホーム事業からの一考察. アスペハート, 31, 76-81.

松田裕次郎 (2012). 発達障害の人たちのひとり暮らしを地域で支援するために: 地域生活移行に向けた滋賀での取り組み. アスペハート, 32, 68-76.

2. 学会発表

福元康弘・四ツ永信也・内倉広大・小久保弘幸・新條嘉一・佐藤誠・肥後

祥治・雲井未歓・片岡美華 (2012). 日々の授業を対象にした授業研究会の在り方と効果の検討: 授業研究を基軸とした豊かな学びをはぐくむ授業づくり. 日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集.

藤原直子・原口英之・高橋咲子・元谷陽子・竹ノ内千智・肥後祥治・有川宏幸 (2012). 「ペアレント・トレーニング」を地域での実践に広げるために (2): 地域におけるペアレント・トレーニング. 日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集.

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

図１　横浜市の取り組みイメージ１

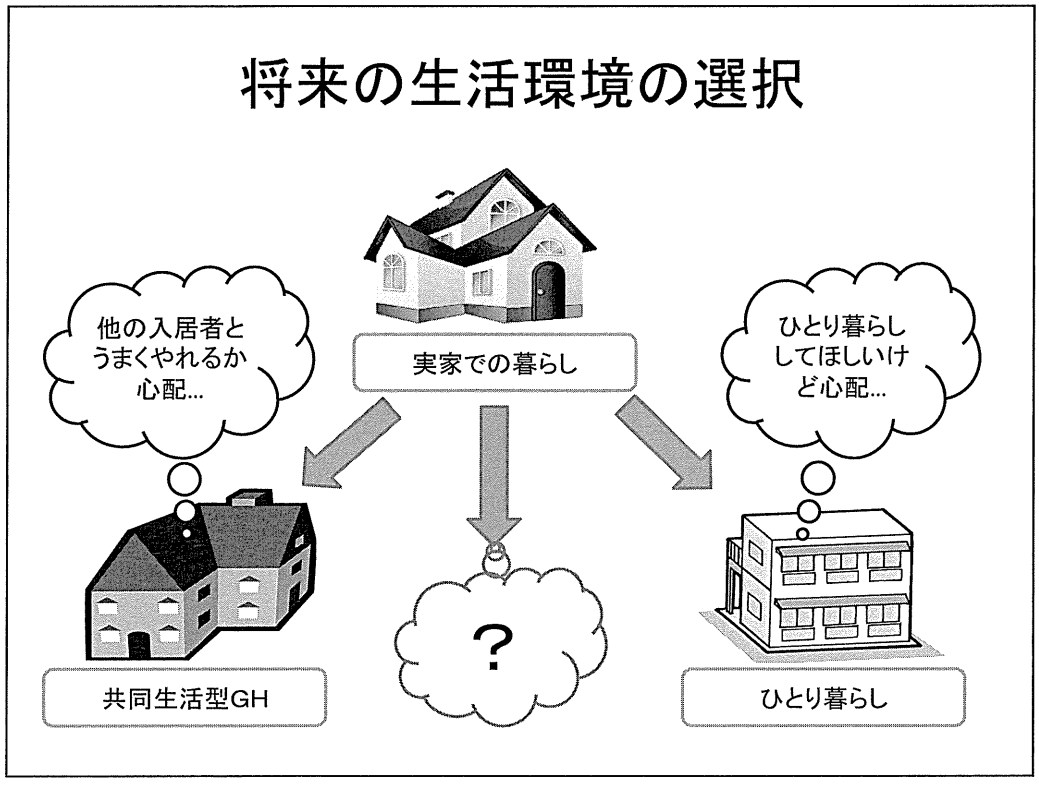

図２　横浜市の取り組みイメージ２

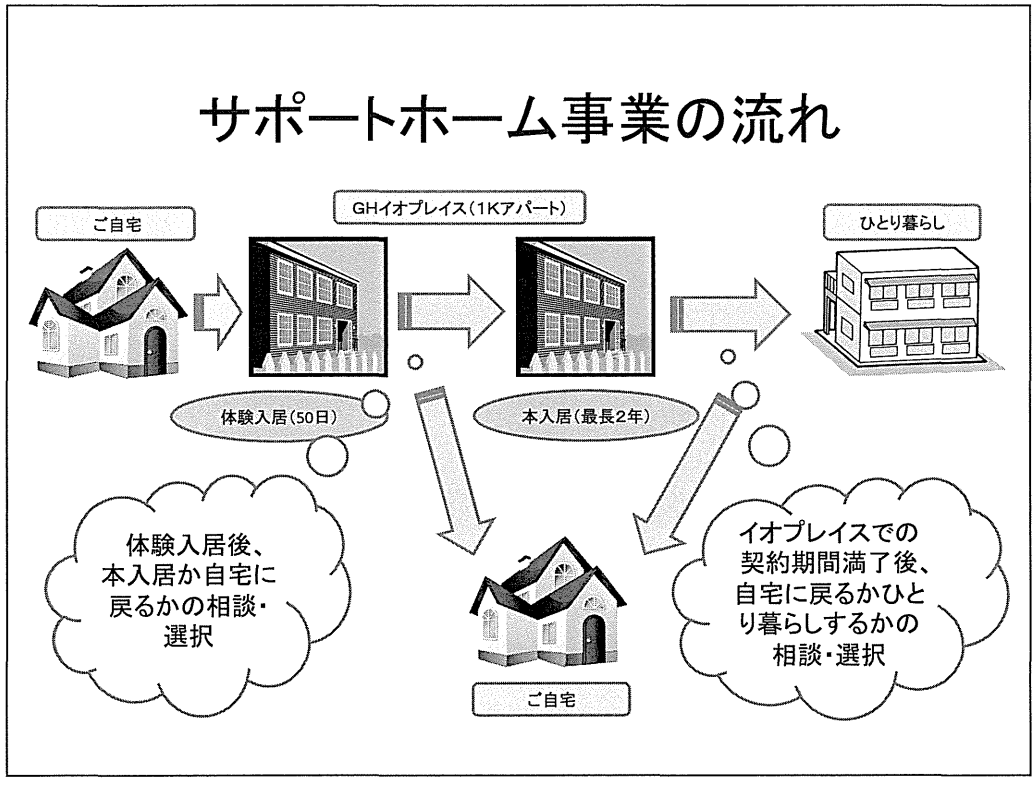

図３　横浜市の取り組みイメージ３

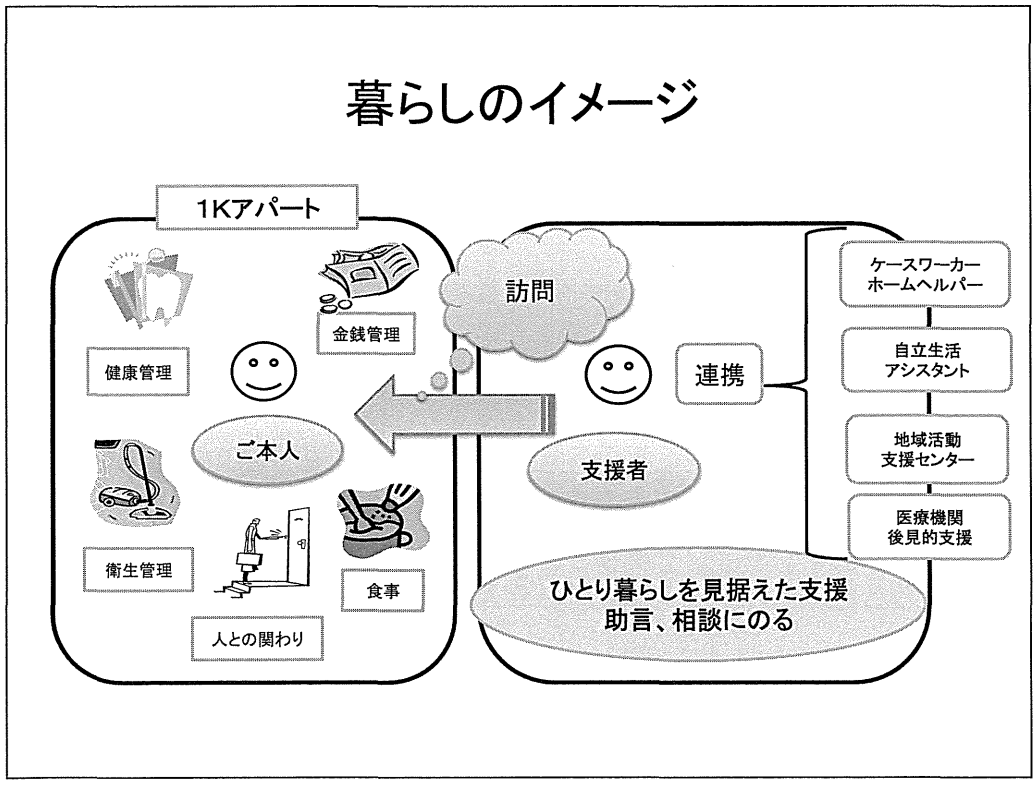

表1　滋賀と横浜での取り組み

	支援内容	支援しやすさ	特記事項
食事	記録用紙を渡し、記録をつけてもらう	○	・記入式で把握（体調管理、服薬管理、日々の振り返り等）
	買い物同行	○	・スキルを教えてできるものは、一度一緒にやり方を確認すると、本人ができやすい。
	食事作り（スキルを教える）	○	
	メニューの提案	×	
	レパートリーを選択性にする	△	
	カロリーコントロール（構造化を用いて伝える）	×	
	栄養バランスを伝える	×	・食事は、栄養バランスを考えたり、メニューのレパートリーを広げる支援が大変。
衛生管理	洗濯・掃除のスケジュールの提案	○	・洗濯・掃除等のスケジュールの提案は、相談しながら決めていくことで入りやすい。
	洗濯・掃除を自主的に行う	×	
	ごみの分別の仕方を教える・見守り	△	
	入浴、シャワーで洗う部分を伝える	△	・細かい洗い方や体臭、服の汚れなどの指摘はしにくい。
	洗濯のスケジュールの提案	○	
	身だしなみの声掛け	△	・一時的にできても、長期的に確認していかないとやらなくなることもある。
金銭管理	小遣い帳をつけてもらう	○	・仕送りを含め、生活できるだけの収入が必要。
	小分けで項目ごとにお金を渡す	○	
	銀行窓口やATMを同行して利用できるようにする	○	・スキルだけは獲得しやすい。
	節約の意識を伝える	×	・節約は必要性がなければ伝えにくい。
	金銭感覚を身に着けてもらう	×	・金銭感覚は経験が必要のため、時間がかかる。
健康管理	医者との連携を図る	△	・本人の意思にもよる。
	服薬の場合、薬を整理し時間を決める	○	
	体調管理のマニュアル提示（熱が何度で休む等）	△	・体調不良に気づかない。
	生活リズム（睡眠等）の把握	△	・睡眠時間を記録で把握。
	体重管理の提示	△	
	手の抜き方の提示	△	・本人の意思にもよる。
人とのかかわり	言動を振り返る（その場で不適切なことを伝える）	×	・不適切な言動の振り返りは事後的になることが多い。
	意思を他者に伝える（定期的に面談日を設ける）	×	・入居者の潜在スキルにも大きく左右される。
	支援者に相談（困ったときは携帯やメール）	△	
	日中の出来事を支援者に話す（話を促す）	△	
	対人トラブルの対処（コミック会話で振り返り）	×	
	書いて振り返る	△	
	ニーズを拾う	×	・支援者の経験や支援の仕方にも大きく左右される。
その他	相談しながら1週間分のスケジュールを立てる	○	・週5日の訪問から、1週間に1～2時間（滋賀）・2週間に1回（横浜）と訪問程度を減らす。
	事前に誰に連絡すればいいかを伝える	○	・経験へのアプローチ（スキル獲得）はしやすいが、自主性や継続性の支援は難易度が上がる。
	同行して消耗品や服の買い物のスキルを身に着ける	○	
	余暇の過ごし方の提案をする	△	・本人の意思にもよる。
	火事や災害の発生時の行動を伝える	△	
	相談しながら得意な点・苦手な点を知る	△	
	危機管理を身に着けてもらう	△	

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

名古屋市での一人暮らしに対する支援ニーズ把握のための取り組み

研究代表者
辻井正次（中京大学現代社会学部）
研究協力者
田中尚樹（非営利活動法人アスペ・エルデの会）

研究要旨
本研究では、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会における地域生活支援の取り組み（ライフプランニングのプログラム，一人暮らし支援）を通して，その実践内容と成果および課題を分析した。ライフプランニングの取り組みからは，個々のスキル獲得の支援に加えて，計画を立てて見通しをもって行動することへの支援の必要性が明らかとなった。一人暮らし支援の取り組みからは，生活を行う上で必要なことを知識として知らないことを確認していくことの必要性や，一人暮らしをしていても困った時には相談できる人を確保することの重要性，現行の支援サービスにはないようなタイムリーな訪問支援，生活スキルに関する学習の機会が，発達障害者にとっても利用しやすい支援になることが示唆された。

A．研究目的

本研究では，将来的に全国で実施できるような成人期の発達障害者の支援モデルを構築するために，特定非営利活動法人アスペ・エルデの会における地域生活支援の取り組み（ライフプランニングのプログラム，一人暮らし支援）を通して，その実践内容と成果および課題を分析した。

B．研究内容

【ライフプランニングの取り組みについて】

1）ライフプランニングのプログラムについて

アスペ・エルデの会では、成人期の会員が 70 名以上になる。近年 30 歳代の人が増えており、就労のことだけでなく、ひとり暮らしや親のサポートを

受けなくても生活できるような居住についてのサポートも考えなければいけなくなってきている。

その中でライフプランニングというプログラムを設けて、平成23年度から実施している。1年目はライフイベントやそこにかかる費用などを学習した。そして2年目である平成24年度は、その中でもひとり暮らしをするという設定のもと、スキル、情報、費用など必要なことについて勉強会と実習を行った（表1参照）。毎回の参加者20から30名ほどで固定ではなかったが、毎回参加している人の割合が多かった。

2）ライフプランニングから考えられる課題について

本プログラムの3回目までから確認できたことを以下に挙げる。

- 自分が直接支払いをするもの以外で、食費、光熱費等支払いがあるという認識がなかった。特に基本料金の部分の認識は弱かった。家族と同居している場合、生活費を入れることの意味が分かった人もいた。
- 入浴や洗濯などは家庭で頻度なども異なり、家庭ごとの習慣になっている。
- 趣味などに使う金額の上限は決めている人が多かった。それでも我慢できず使いすぎる人もいる。
- 衣類を一人で買いに行っている人が少なかった。
- 調理経験がある人が多いが、一食分の複数のメニューを作る経験ではなく、一品だけを作る経験が多かった。
- 学齢期のころから家事のなかで役割として継続してきたものは大人になっても続けている。それ以外の家事については自分には必要性がないと思っている人もいた。
- 調理では、メニューを決める時に「食べたいもの」だと意見を出せるが、「自分たちで作りたいもの」

を聞くと意見が出なくなる。

- メニューのレシピは調べて、材料なども把握することはできる。
- 嗜好品の買物はするが、調理のための食材を買うという経験はしていない人がほとんどであった。
- 食材など、必要な分量なども含め計画を立てて買い物することは難しそうであった。
- 複数のメニューを作るには作る順序も考えなければならないが、全体的に難しそうであった。

以上のことから、生活費や調理や買い物なども経験など踏まえた学習をしていることについては支援の必要性はない。一つひとつのスキルは身についていても、調理では複数の料理を作ったり、毎日メニューを考えたり、数日分の買い物をするなど計画を立てて見通しを持って行動することには難しさを感じていることが分かった。そうした計画立てについても経験を通して学習していけるような支援は必要である。また、継続的に行えているかどうかを確認するような見守り支援は必要だと思われる。

【一人暮らし体験について】

1）一人暮らしの必要性について

発達障害者のグループホームの利用も増えてきている。一戸建てのものだけではなく、アパートの数部屋をまとめてグループホームという形態を取っているところもある。対人関係が苦手であったり、一人で家事などもできたりする人たちにとっては、グループホームよりはひとり暮らしの方を望んでいる人もいる。横浜市と滋賀県でもグループホームを通過型としてひとり暮らしを目標とした取り組みをしている。そこで、アスペ・エルデの会では実際にひとり暮らしをしてもらい、その中で支援のニーズ把握を行った。

2) 一人暮らしの実施者について

アスペ・エルデの会に所属する発達障害者４名がひとり暮らしに協力した。うち２名（A、B）は通勤のことを考え、これを機に、体験ではなく実生活を続けていくことになった。ほかの２名（C、D）は１か月の体験ということで実施した。

実施者とその様子については以下のようである。

【A：療育手帳保持，一般就労正規雇用，25歳，男性】

これまでに１週間、２週間、１か月、３か月とひとり暮らしの練習をしてきた。毎回、課題を決めて取り組んだ。１回目は掃除と自炊の回数、２回目は１週間の食費の上限、それ以降は回数を増やしたり、継続して取り組めるようにしている。また買い物で値下げした惣菜を買ったり、外食、その他インスタントなども調理に加えて組み合わせてみたりするなども課題にして取り組んだ。）

- 掃除機があったが使おうとしなかった。実家では掃除機を使ったことがあるが、機種が違い操作方法も違うため、使い方が分からなかった。使い方を覚えるとその後は使用できている。
- 大容量ゴミ袋が残り１枚になったので、その袋に生ごみなどをためて、店の小さなレジ袋に入るだけ詰めて、ゴミ出しをしていた。本人は「ごみは出している」というが、捨てられないゴミが大量に残っていた。ゴミ袋が少なったときに購入し補充することを知らなかった。
- 床用のモップを使用したあと、自分でフックを壁につけ引っ掛けていた。モップの先がテーブルの上に位置していた。食事の時に目の前に汚れたモップを見ることになるが、気にしていなかった。
- 週末に１回掃除をすると決めてい

るので、床にほこりや抜け毛など目立つようになっても、取り除こうとしなかった。

- 職場では 2 年前から後輩の教育係をしており、また自分の意見を会議で求められるなど悩んでいた。退職を考え、専門学校の試験を受けていた。悩みの把握や専門学校の受験など家族が知らないことを確認することができた。
- 残業が急きょ入ることで、訪問の時間に帰宅できないことがあった。また仕事の都合で訪問日が決められないときもあった。

【B: 手帳なし，一般就労正規雇用社員，27歳，女性】

混雑する電車での通勤が苦手で、通勤時間も 1 時間以上かかるため、始発の電車で出勤し、会社で開錠されるのを待っていた。そのため、会社から近いところで生活することを望んでいた。

- アパート契約をした後に、仲介業者が「たばこなどで汚れなど出たときは入居者負担で修復」という項目を追記した他、別の費用も掛かることを説明してきたので、不信と不安が募った。会の顧問弁護士にも相談した後、入居することにした。
- 一通りの家事はできるが、趣味などの時間を優先するため、掃除や片付けをしなくなった。
- 実家への連絡をまったく取らなくなった。
- 仕事で帰りが遅い時は一人で夜道を歩くため、周りは何か被害に遭わないか心配しているが、本人は何も気にしていなかった。駅からタクシーを使うことも時には必要だということを何回か話をした後、了解の返事が返ってきた。
- 一人で大体のことができることと、自分の生活スタイルがあるので、支援者側の指示が入りづらかったようである。

【C: 精神保健福祉手帳保持，障害者雇用パート勤務，26歳，女性】

職場から近い場所でひとり暮らしを行った。母親が仲介業者を通してアパートの賃貸契約をしたが、母親も本人も契約に際して現地を確認しなかった。

- 家事は大体のことは自分でできる。夕飯の残りを朝食や弁当に入れるなどもしていた。調理のレパートリーはいくつかあるが、１食分のメニューの組み合わせは、一人分のため分量の調整にも限度があり、難しそうであった。
- 下着や生理用品など目のつくところに片付けていた訪問者などが来ることも考え、見えないところに片付けることを指摘した。
- 買い物は一人ではしてこなかったため、会のスタッフが同行し買い物に行っていた。

【D: 療育手帳保持，障害者雇用パート勤務，29歳，男性】

家族の意向もあり、ひとり暮らしを行った。家事については、自分の作業着の洗濯のみしていた。ひとり暮らしでも、自分で作業着以外の衣類も洗濯をするということを目標にしてひとり暮らしに挑んでいた。

- 一度パスタゆでるということを実施したが、調理はその１回だけだった。あとはコンビニエンスストアで買い物をしていた。スーパーは商品がたくさんあるため、探すのに時間がかかりつかれるためとのこと。
- 窓を開けているか確認したら、一度も開けていないとのこと。換気も大事なので、毎日朝１回開けることを決めたら、その後はできていたようである。
- 洗濯はしているが、軍手など手洗いのものは指先の不器用さなどから上手にできず、週末実家に持ち帰り親に任せていた。
- 棚に衣類、薬、雑誌など片づけて

いたが、同じ段にまとめて入れていた。種類ごとに分けて、置く場所を決めた。その後は、整理して片付けようとしていた。

- 電話や呼び鈴についても、実家だと出なかったが、ひとり暮らしだと出ていたようである。

D．考察および結論

【AからDの一人暮らしから課題を考える】

起床から就寝まで一日一日を送ることはできるようである。他者から見ると、気になる部分は出てくるので、集団よりは一人での生活の方が快適に過ごすことができる人もいるということが予測できる。

その中で、まずは整理整頓について、個々で片付けの状態は異なるが、衛生面や種類ごとの片づけ方などできるとよいという部分は共通していた。生理用品や下着類などは他者の目につかないところに片付けたほうがよいことや、掃除のタイミング、器具の扱いなど理解できれば行動しても起こすことができる。能力としてできないのではなく、知らない、わからないからできていないことについては、教えてできるようにする支援が必要になってくる。しかし、覚えた後も、定期的な確認は必要だと思う。買い物についても、何をどれだけ買えばよいか考えることが難しかったり、店でたくさんの商品の中から探し出したりすることが困難な人がいる。付き添いをすることで、店内の商品の配置や買うものの種類と分量など経験として積むことができると、一人でもできるようになっていく。

今回は仕事の悩み相談もあったが、家族とも離れていると、相談できる人が家族や職場以外で必要だと感じた。家族と同居の場合は、様子から悩みがあることなど発見できることもあるが、ひとり暮らしをすると自分からも発信できず、周りにも気づいてもらうことができないことも考えられる。その結

果、職を失うことにもあり、さらにひとり暮らしもできなくなる可能性も出てくる。

今回の取り組みから、本人だけでなく家族にとっても住居の契約の部分で問題が見られたため、住居探しや賃貸契約などにも支援が必要な場合も出てくることが予想される。

また、月の支出の確認や食材や生活用品の購入など、そして衣替えやクリーニング店の利用、契約の更新手続きなど年に一回もしくは数回しかないこと把握については今回の取り組みではできなかったので、今後の課題である。

【一人暮らしをするために必要な支援について】

今回の取り組みから、ひとり暮らしをする場合、多くの人が自炊や掃除など経験としており、スキルとしては持っていることが分かった。しかし、何日もひとりで生活しようとすると課題が出てくる。ただし今回参加した会員は、幼少期から発達障害の診断を受けており、早くから大人になってから困らないようにと家事については練習をしてきている。ただ、汚れがなくなるようにきれいにするというような程度を意識することや、初めてのこと、興味のないことなどはイメージや見通しが持てないことで、自発的に行動することは難しい。そのため、支援として、生活の中から身につけるとよいスキルと把握し、教えていくことが必要である。知らないことについては学習する機会が必要である。また調理や買い物などの計画を立てることや計画通りに遂行できたかの確認が必要である。個人学習よりもグループワークで多くの人の意見を聞きながら理解を深めることも必要性を感じている。

企業就労をしている場合、残業などで訪問予定時間に帰宅できないことも出てくる。事前にわかっていれば調整は可能だが、急な場合も多く、ヘルパーが訪問しても何もできないことが予

測されるため、対応の仕方が課題になる。会員の最近の様子からも、金銭管理や消費者被害、仕事での問題などの把握をしていないと、被害に遭ったり、失職したりして早急の対応が求められる。ひとり暮らしをすると、家族との連絡も取らなくなり、問題の把握がしづらくなるため、家事援助だけでなく相談を受けやすい体制を取り、必要な時に適宜対応できるような支援も必要である。

今回二つのケースでアパートの契約時の問題があった。そのためひとり暮らしへの移行時の賃貸契約の手続きや注意点などもできることが望ましいと感じた。

現行の支援サービスにはないようなタイムリーな訪問支援、生活スキルに関する学習の機会などが、発達障害者にとっても利用しやすい支援につながっていくと考えられる。

E. 引用文献

該当なし

F. 研究発表

1. 論文発表

Anitha, A., Nakamura, K., Thanseem, I., Matsuzaki, H., Miyachi, T., Tsujii, M., Iwata, Y., Suzuki, K., Sugiyama, T., & Mori, N. (2012). Downregulation of the expression of mitochondrial electron transport complex genes in autism brains. Brain Pathology, 23(3), 294-302.

Anitha, A., Nakamura, K., Thanseem, I., Yamada, K., Iwayama, Y., Toyota, T., Matsuzaki, H., Miyachi, T., Yamada, S., Tsujii, M., Tsuchiya, K., Matsumoto, K., Iwata, Y., Suzuki, K., Ichikawa, H., Sugiyama, T., Yoshikawa, T., & Mori, N. (2012). Brain region-specific altered expression and association of

mitochondria-related genes in autism. Molecular Autism, 3(1): 12.

Anitha, A., Thanseem, I., Nakamura, K., Yamada, K., Iwayama, Y., Toyota, T., Iwata, Y., Suzuki, K., Sugiyama, T., Tsujii, M., Yoshikawa, T., & Mori, N. (2012). Protocadherin α (PCDHA) as a novel susceptibility gene for autism. Journal of Psychiatry & Neuroscience, 37(6):120058.

伊熊正光・鈴木勝昭・土屋賢治・中村和彦・辻井正次・森則夫 (2012). 高機能自閉症スペクトラム障害者における脳内コリン系の異常. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 17-22.

Ito, H., Tani, I., Yukihiro, R., Adachi, J., Hara, K., Ogasawara, M., Inoue, M., Kamio, Y., Nakamura, K., Uchiyama, T., Ichikawa, H., Sugiyama, T., Hagiwara, T., Tsujii, M. (2012). Validation of an interview-based rating scale developed in Japan for pervasive developmental disorders. Research in Autism Spectrum Disorders, 6(4), 1265-1272

Kawakami, C., Ohnishi, M., Sugiyama, T., Someki, F., Nakamura, K., Tsujii, M. (2012). The risk factors for criminal behavior in high-functioning autism spectrum disorders (HFASDs): A comparison of childhood adversities between individuals with HFASDs who exhibit criminal behavior and those with HFASD and no criminal histories. Research in Autism Spectrum Disorders, 6(2), 949-957.

中島俊思・伊藤大幸・大西将史・高柳伸哉・大嶽さと子・染木史緒・望

月直人・野田航・林陽子・瀬野由衣・辻井正次 (2012). 3 歳児健診における広汎性発達障害児早期発見のスクリーニングツール PARS 短縮版導入の試み. 精神医学, *54*, 911-914.

中島俊思・野田航・辻井正次 (2013). 乳幼児健診における発達障害の客観的スクリーニング方法導入の意義と可能性. 月刊地域保健, *44*, 49-61.

中島俊思・岡田涼・松岡弥玲・谷伊織・大西将史・辻井正次 (2012). 発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴. 発達心理学研究, 23(3), 264-275.

瀬野由衣・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・望月直人・辻井正次 (2012). DCDQ 日本語版と保護者の養育スタイルとの関連. 小児の精神と神経, 52(2), 149-156.

Suzuki, K., Sugihara, G., Ouchi, Y., Nakamura, K., Futatsubashi, M., Takebayashi, K., Yoshihara, Y., Omata, K., Matsumoto, K., Tsuchiya, K., Iwata, Y., Tsujii, M., Sugiyama, T., & Mori, N. (2013). Microglial activation in young adults with autism spectrum disorder. JAMA Psychiatry, 70(1), 49-58.

田中尚樹 (2012). アスペ・エルデの会におけるここ数年の成人たちの就労状況と課題について. アスペハート, 32, 58-63.

田中尚樹 (2012). どこでも活用できる支援を: 発達障害の子どもやその家族のために. チャイルドヘルス, 15 (9), 678-689.

田中尚樹 (2012). 発達障害者の就労支援:支援団体の取組み. 障害者と雇用働く広場, 422, 26-27.

Tsuchiya, K., Matsumoto, K., Yagi, A., Inada, N., Kuroda, M., Inokuchi, E., Koyama, T., Kamio, Y., Tsujii, M., Sakai, S., Mohri, I., Taniike, M., Iwanaga, R., Ogasahara, K.,

Miyachi, T., Nakajima, S., Tani, I., Ohnishi, M., Inoue, M., Nomura, K., Hagiwara, T., Uchiyama, T., Ichikawa, H., Kobayashi, S., Miyamoto, K., Nakamura, K., Suzuki, K., Mori, N., Takei, N. (2013). Reliability and Validity of Autism Diagnostic Interview-Revised, Japanese Version. Journal of Autism and Developmental Disorders 43(3), 643-662.

内田裕之・辻井正次 (2012). 自閉症スペクトラムの困ったこだわり行動への対応法. アスペハート, 11(1), 50-53.

内田裕之・辻井正次 (2012). 発達障害とともに成人期を生きるということ:ADHD と ASD を例に. 教育と医学, 60(6), 480-486.

内山敏・大西将史・中村和彦・竹林淳和・二宮貴至・鈴木勝昭・辻井正次・森則夫 (2012). 日本における成人期 ADHD の疫学調査: Adult ADHD self report scale-screener (ASRS-screener) 陽性群の特徴について. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 23-33.

内山敏・大西将史・中村和彦・竹林淳和・二宮貴至・鈴木勝昭・辻井正次, 森則夫 (2012). 日本における成人期 ADHD の疫学調査: 成人期 ADHD の有病率について. 子どものこころと脳の発達, 3(1), 34-42.

2. 学会発表

Noda, W., Hagiwara, T., Mochizuki, N., Iwasaki, M., & Tsujii, M. (2012). *Effect of a short-term treatment program for anxiety in children diagnosed with autism spectrum disorders.* Poster presented at the International Meeting for Autism Research 2012, Toronto, Canada.

Tsujii, M., Ito, H., Ohtake, N.,

Takayanagi, N., & Noda, W. (2012). *Validation of a Japanese version of the Vineland Adaptive Behavior Scales, Secoond Edition: Clinical utility for assessment of autism spectrum disorders.* Poster presented at the International Meeting for Autism Research 2012, Toronto, Canada.

H．知的財産権の出願・登録状況

該当なし